【学力向上フロンティアスクール用中間報告書様式】（中学校用）

| 都道府県名 | 高知県 |
|---|---|

Ⅰ　学校の概要（平成１５年４月現在）

| 学校名 | 物部村立大栃中学校 | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 学　年 | １年 | ２年 | ３年 | 特殊学級 | 計 | 教員数 |
| 学級数 | １ | １ | １ | ０ | ３ | １０ |
| 生徒数 | １９ | １１ | ２４ | ０ | ５４ | |

Ⅱ　研究の概要

１．研究主題

基礎学力の定着と学力の向上を図る
（本年度重点項目）
仲間を大切にし、ともに学びあう集団づくり

２．研究内容と方法

⑴　実施学年・教科

・１，２，３年生・数学
生徒の学習状況に差がでやすい教科で、個に応じた対応を要することが多いため。
・２，３年生・英語
生徒の理解の状況に差があり、個に応じた対応を要することが多いため。

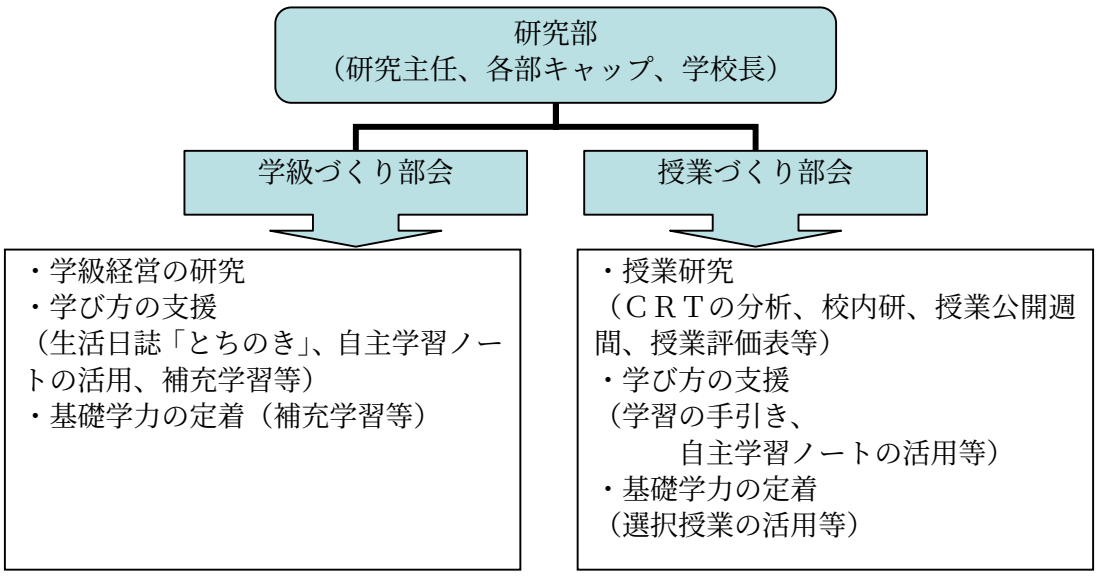
※本校では、研究対象は全教科・全学年で、TT 体制を活用した授業の研究に取り組むとともに、授業の指導改善と並行して、学級・生徒会・授業における「仲間を大切にし、ともに学びあう仲間づくり」のあり方の研究を行う。

(2)　年次ごとの計画

| | |
|---|---|
| 平成15年度 | ○　テーマ<br><br>「仲間を大切にし、ともに学びあう集団づくり」<br><br>○　研究の見通し<br><br>仲間を大切にする集団づくりを図ることで、生徒の主体的な活動が促され、自ら学ぶ力が育つものと考える<br><br>○　研究の内容・方法<br><br>学力の向上を図るには、個に対応する部分と集団に働きかける部分との両方が必要であると考え、両方への働きかけについての研究を進めていく。<br>個に対応する事がらとしては、生徒一人ひとりを見据えながら、個に応じた学習支援を図っていくことを目的に、集団への働きかけとしては、本年度の重点項目でもある「仲間を大切にし、ともに学びあう集団づくり」を目標に、次の取り組みをそれぞれ進めていく。<br><br>＜授業づくり部＞<br>・『自主学習ノート』の活用の研究<br>従来から取り組んできた『自主学習ノート』に授業評価としての役目をもたせ、授業改善に役立てるとともに、個々の生徒理解に努めながら、生徒のつまずきに対応できるような『自主学習ノート』の活用について授業づくり部を中心に研究を行う。<br><br>＜学級づくり部・生徒会＞<br>・生徒の主体的な意識を育てる。<br>学力の定着を考えるとき、家庭学習が重要で、家庭学習の充実を図るには、主体的な意識による学習が不可欠である。なぜなら、学習に対して主体的な意識がもてたときに、生徒は自発的に家庭学習に取り組んでいくと考えるからである。そこで、生徒が課題意識をもち、主体的に活動できる生徒集団を目指し、学級づくり部や生徒会を中心に本年度はまず、日常生活や行事への取り組みを通して、主体的な意識を育てる学級経営のあり方や生徒会活動の運営の研究を行う。 |

| | |
|---|---|
| 平成16年度 | ○　テーマ<br><br>「家庭学習に主体的に取り組む生徒を育てる」<br><br>○　研究の見通し<br><br>『なぜ？』の授業を進めることで、授業において学習の理解が深まり、学習することに対して主体的な意識が育つとともに、自己を大切にする気持ちが芽生え、自発的な家庭学習につながるものと考える。<br><br>○　研究の内容・方法<br><br>前年度の研究成果より、生徒が主体的な意識をもつことで、集団としての大きな力が発揮できることが得られた。このことを授業にも活かし、生徒と教師の協働で創造する分かる授業（『なぜ？』の授業）の研究を進める。<br><br>＜授業づくり部＞<br>・『なぜ？』の授業<br>生徒の『なぜ？』を引き出しながら、『なぜ？』を取り入れた授業を生徒と教師が協働で創造しながら、生徒に授業を創造する当事者の一人としての意識を育て、授業を活性化させる。<br><br>・『なぜ？』をもとにした個に応じた学習支援の研究<br>生徒から出される『なぜ？』の傾向を分析しながら、生徒の個に応じた学習支援を図っていく。<br><br>＜学級づくり部・生徒会＞<br>・お互いに支えあう仲間づくり<br>前年度の「仲間を大切にし、ともに学びあう集団づくり」を発展させ、主体的な意識をもつことが学びの基礎であり、学ぶための条件であるとし、生徒の主体的な意識を高めながら、豊かな学びの土壌として、お互いに認め合い支え合う仲間づくりを行う。また、学校を構成する当事者としての意識を高める学級経営のあり方や生徒会活動の運営を研究し、学びの活性化を図る。 |

(3)　研究推進体制




本年度は、重点項目の「仲間を大切にし、ともに学びあう集団づくり」について、生徒が課題意識をもち、主体的に活動できる生徒集団を目指し、学級づくり部や生徒会を中心に学級経営のあり方や生徒会活動の運営の研究を行う。授業づくり部においても、生徒が主体的に取り組む授業や家庭学習についての研究を行っていく。

○　定例研修

研究部会（火曜日）、各づくり部会（第１水曜日）、研究職員会（第２水曜日）

Ⅲ　平成１５年度の研究の成果及び今後の課題

１．研究の成果

本年度は学力向上フロンティアスクールとして、学力の向上を図るために、授業づくり部、学級づくり部を中心に、個に対応する部分と集団に働きかける部分との両方から取り組みを進めてきた。

＜授業づくり部の取り組み＞

**・『謎・解決すっきりノート（自主学習ノート）』の活用の研究**

従来から取り組んできた『自主学習ノート』に授業評価としての役目をもたせ、授業改善に役立てるとともに、個々の生徒理解に努めながら、生徒のつまずきに対応できるような『自主学習ノート』の活用について授業づくり部を中心に取り組んできた。その成果を次にあげる。

① 学習につまずきを感じている生徒に視点をあてた取り組みの中で、『自主学習ノート』を、授業で分からなかったことや疑問に思ったことを書き出すノートとしての性格付けをすることにした。生徒たちにも教師の思いを伝え、働きかけた結果、生徒たちの取り組みによって、名前も『謎･解決すっきりノート』と改名された。このことは生徒たちが『自主学習ノート』に対して主体的に考え始めていることを示している。

その後、生徒たちは『謎・解決すっきりノート』に授業で学習したことの『なぜ？』を書くようになり、学習に対して『なぜ？』という意識をもちはじめた。そのため授業中においても、生徒から『なぜ？』という声が出されたり、理解できていない仲間の『なぜ？』を取り上げるなど、その『なぜ？』について、みんなで学び、学級の学びを深めていく結果も出されるようになった。このことは生徒が授業に対しても主体的な意識をもちはじめた結果であるといえる。

このことをもとに、授業改善においても、この生徒の『なぜ？』を取り上げることからはじまる『なぜ？』の授業に挑戦している途中である。この『なぜ？』の授業には生徒の授業に対する主体的な意識を高めて行く可能性が伺えるので、来年度も研究を深めていく予定である。

② 本年度この生徒の『なぜ？』に着目してきたことで、今まで見過ごしてきた生徒のつまずきの傾向や個の学習状況の把握ができ、個に応じた対応ができた。

来年度も引き続き、『謎・解決すっきりノート』を活用して、生徒の『なぜ？』に着目して、学習に対する生徒の主体的な活動を深めていく予定である。そして「基礎学力の定着と学力の向上を図る」ための、基礎となる自発的な家庭学習につながっていくように取り組んでいきたいと考えている。

＜学級づくり部・生徒会＞

**・生徒の主体的な意識を育てる。**

本校では、主体的意識を高めることが、学びを深め、自発的な家庭学習を創り、その学びが「基礎学力の定着と学力の向上」につながると考え、本年度は学級活動や生徒会活動において、生徒の主体的な意識を育てることを重点的に考え、取り組んできた。

① **生徒が主体的に取り組む行事づくり**

生徒会では、生徒が課題意識をもち、主体的に活動できる生徒集団を目標に、野外活動・運動会などの行事を中心に、生徒の主体的な意識を育てる取り組みを展開してきた。主体的な意識を育てるために、次の点を確認し、取り組んでいった。

**・できるだけ生徒の自己決定場面を保障していく。**

主体的な意識を育てるためには自己決定の場を設定していくことが大切で、生徒の意思を発する行為を保障するということで、生徒は納得して行動を起こすことになるのである。つまり「やらされるのではなく、自分でやる。」ということを確認するのである。

**・「目標を看板にしない」取り組み。**

生徒たちの要求活動に「権利と責任」を学ばせることを職員会で確認し、「目標を看板にしない」取り組みを要求していくこととした。このことにより、生徒は取り組みに具体的な工夫を自ら施し、主体的な取り組みを進めていく結果となった。

これらの取り組みで、生徒は行事に対して、「やらされる行事ではなく、自分たちが行事を創る」という思いをもって取り組む姿が見られるようになっていったことは、大きな成果である。

**② 生徒と教師がともに創りだす学びの場づくり**

学級づくり部では、生徒会の行事で育ってきた生徒の主体的な意識をさらに深め、生徒と教師が学校を創りだす当事者としての意識をもたせる取り組みを行ってきた。

**・「明日への扉」**

全校の班長会が中心となり、１年生から３年生までが教科ごとにお互いに学びあう補充学習を行ってきた。期間は定期テスト発表期間中と短いものの、自分たちが話し合いながら、納得して主体的に進めてきた取り組みなので、意欲的に学ぼうとする姿が見られる。また、取り組む中で、分からないところを上級生に習うなど、学校全体の集団の仲間づくりにつながっている。

**・「寄りと学びの会」**

この会は、生徒と教師が学校を創造する当事者として、身近な課題から校則まで、何でも話し合ったり、決議をする場として設ける。この会は、生徒と教師が協働で創りだしていくことが前提で、生徒に学校を創りだす当事者の一人としての意識を育てるために、生徒の合意を得るところから始めていった。

本年度は、「学校はどうしてあるの？」「卒業式ってなに？」をテーマに３回実施する。会は、今回は意見を出し合うときは、全校生徒と教職員が小グループに分かれ、それぞれに話し合い、決議を必要とする場合は全体で合意していく形態をとってきた。まだ、回数も少なく、今後の改善も期待されるが、生徒や教職員一人ひとりの意見をお互いに共有していくことで、自分たちが学校を創っていくという当事者としての意識をもてたことは大きな成果である。

これらの取り組みによって、生徒たちは自分たちが意見を出し合いながら、自分たちの意見で行事をはじめ、学校生活を創っていこうとする態度をもちはじめている。このことは本年度の成果といえる。また、自分が集団の中で受け入れられ、自分の意見を大事にされる集団としての土壌は、本年度の重点目標である「仲間を大切にし、ともに学びあう集団づくり」につながっている。

最後に、本年度の取り組み全体を通して、特に得たことは、学びについて、またそれを含む学校生活全体において、生徒たちが主体的な意識をもつことなしに「基礎学力の定着と学力の向上」はありえないということである。視点を変えると、そういった主体的な意識を生徒集団に創りだすことで、「基礎学力の定着と学力の向上」の道筋が具体的に見えてくるということである。そして、これらの取り組みは、山間の小規模校は不利とされてきたことが、本年度の実践により、小規模校だからこそ、生徒たちは納得すれば、前向きに努力し、集団として大きな力を発揮できることを発見するに至ることができた。

２．今後の課題

来年度は学力向上フロンティアスクールの最終年度を迎える。本年度、取り組んでみて、生徒の変容を感じることはできたが、具体的な成果を客観的なデータにできていないため、来年度は具体的な成果が見えるような取り組みにしていくことを考えている。取り組み体制としては、来年度も本年度に引き続き、TT 体制を活用して、効果的な授業形態（TT 授業や少人数）の活用もふくめた指導方法の工夫改善を進めながら、生徒の『なぜ？』を取り入れた、生徒と教師がともに創りだす分かる授業（『なぜ？』の授業）の研究を進めていきたいと考えている。

＜授業づくり部＞

**・『なぜ？』の授業の研究**

本年度の取り組みから、生徒は主体的な意識をもって取り組む中に、学びがあることを理解してきている。そのことを生かし、生徒が授業を創造する当事者の一人としての意識をもって授業に臨むような手立てを研究していきたいと考えている。その方法として、生徒の『なぜ？』から始まる『なぜ？』の授業について取り組んでいく予定である。

『なぜ？』の授業とは、授業中や『謎・解決すっきりノート（自主学習ノート）』に出される生徒の『なぜ？』をもとに授業を展開していくものである。生徒の「分かった。」は、「なぜ？」という自分の中に生じた疑問が明らかになり、その事象について理解できたときに、初めて「分かった。」と実感できるのである。つまり、生徒の『なぜ？』に着目することは、生徒が授業を創りだす当事者の一人であることが前提となるため、そのことが学習への主体的な意識を高め、自発的な家庭学習へつながっていくと考える。

**・『なぜ？』をもとにした個に応じた学習支援の研究**

本年度の取り組みの反省から、生徒の『なぜ？』を引き出すには、授業や『謎・解決すっきりノート（自主学習ノート）』だけでは不十分で、『なぜ？』を出せない生徒の『なぜ？』をどう引き出していくかの手立てを考えていく必要がある。また、生徒から出される『なぜ？』の傾向を分析することで、生徒の学習のつまずきが明らかになるため、その結果をもとに、授業改善や生徒の個に応じた学習支援を図る取り組みを行っていく。

＜学級づくり部・生徒会＞

**・お互いに支えあう仲間づくり**

本年度の取り組みから、不利だと考えられてきた小規模校という環境も、一定の条件さえ整えば有利であることに気づかされた。それは、生徒たちは納得すれば、前向きに努力し、集団として大きな力を発揮することがわかったことである。そこで本年度の「仲間を大切にし、ともに学びあう集団づくり」を発展させ、主体的な意識をもつことが学びの基礎であり、学ぶための条件であるとし、生徒の主体的な意識を高めながら、豊かな学びの土壌として、お互いに認め合い支え合う仲間づくりを行っていく。

そのために、学校を構成する当事者としての意識を高める取り組みとして、学級づくり部を中心に『明日への扉』・『寄りと学びの会』の充実を図るとともに、お互いに支えあう仲間づくりを前提とした学級経営のあり方や生徒会活動の運営の研究を進めながら、学びの活性化を図っていく。

Ⅳ　学力把握のための学校としての取組

| |
|---|
| ・ＣＲＴを各学期に実施し、定期的に学習の到達度を把握していく。 |

Ⅴ　フロンティアスクールとしての研究成果の普及

| |
|---|
| ＊　中・高交流会<br>日　　時：　6月3日（火）<br>場　　所：　大栃中学校<br>対　　象：　大栃高校教職員<br>会の目的：　両校の教育実践を話し合う。<br>＊　グループ学習会<br>日　　時：　１０月１９日（火）<br>場　　所：　大栃中学校<br>対　　象：　中村市立東中筋中学校　教諭２名<br>会の目的：　家庭学習の充実について、両校の教育実践をもとに話し合う。 |

---

◇　次の項目ごとに、該当する箇所をチェックすること。（複数チェック可）

【新規校・継続校】　　(１５年度からの新規校)　　１４年度からの継続校

【学校規模】　　(３学級以下)　　４～６学級
７～９学級　　１０～１２学級
１３～１５学級　　１６学級以上

【指導体制】　　少人数指導　　(Ｔ．Ｔによる指導)
その他

【研究教科】　　国語　　社会　　(数学)　　理科
(外国語)　　音楽　　美術　　技術・家庭
保健体育　　その他

【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】　　(有)　　無